

歴史の道をゆく

the history of road

来満街道 ③

山中宿〜軽井沢を経て県境へ

鬱蒼たる藪に、道筋が全く確認できない朝繋〜尻喰坂〜山中宿の区間の踏査を断念し、国道104号を迂回して山中宿に向う。

山中宿側の道筋も、荒廃や植林などによって失われた部分が多いが、かつて荷宿があったという場所に、干上がった池の跡がはっきり残っている。中島にオンコ(イチイ)の木があり、池の部分には大きな水芭蕉が群生している。

山中宿は大湯(鹿角市)と関(青森県田子町)のほぼ中間にあたり、往時は庭園の傍らに大きな屋敷があった。間口17〜18間の豪壮な構えで、奥座敷には



「友子」関係の人々が一緒に葬られた墓石がわずかに残っている。集落跡右手の小学校跡には、戦前の奉安殿だけが痕跡をとどめている。

道は集落跡から左に外れ、大きな杉の木の下を通ってセンナ沢沿いの藪を進む。尾根筋に取り付いてからは、全体には大柴峠ルートより歩き易い。来満峠(611m)から先の下りはフルドーザイ道となり、ほぼ旧道と重なっている。「弥勒の滝」入り口近くの熊原川岸に出た、自動車の通れる道に合流していた。また、鉱山採掘による坑道を利用したトンネルもあり、山越えをしないで反対側に出る方法もあったようだ。しかし、途中縦坑が何本もあり危険なため、利用するのは一部の人だけであつたらしい。

座敷わらしが出たこの話も伝えられている。この宿で銅の継立てが行われたほか、大湯側から運ばれてきた米や酒などと、三戸側から運ばれてきた塩、魚介類、鉄材などを交換したという。

山中宿を出た街道は、軽井沢〜武道原と山裾を通る形で国道104号に近づく。足洗川の渡しを越えて国道を横切り、毛文字坂へ。武道原から足洗川への旧ルートは、牧場造成により消えている。毛文字坂は、鹿角郡と三戸郡の境で、今も秋田・青森の県境である。

牧場内に、三戸へ向う旧道の道筋かと思われる作業道路があるが、これが街道の名残かどうか定かでない。国道を迂回して田子町に進むと、右手の林間から旧道が合流してくるが、その地点にも「鹿角街道」の標識や石碑が建っている。この旧道が、「来満峠越え」と「不老倉峠越え」からの道である。



不老倉峠越え

不老倉鉱山の施設は安久谷川沿いに、7kmほどに渡り点在していた。その最奥部には選鉱所跡やコンクリートで固められた坑口、鉱滓のダム、不要になった鉱石(ガラ)の捨て場、山神社などが残されている。

その山神社の横を流れる岳ヶ沢の右岸斜面に、不老倉峠への道が今も残されている。雑木林の中を細々と続く道は、登り始めてから一時間ほどで峠に達する。下りは急坂が少し続くが、降りきった平坦な道をしばし歩くと、来満峠からの道に合流する。

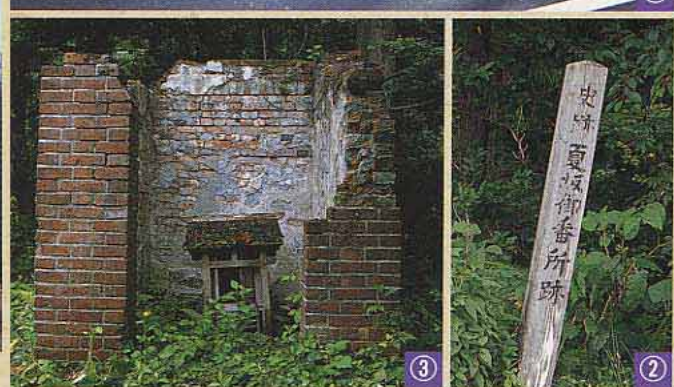
このルートが大柴峠越え・来満峠越え・不老倉峠越えの中では最も山越えの距離は短く、高低差は少なかったが、鉱山集落からは大きく遠回りになるため、利用する人は多くはなかったようだ。

田子町・夏坂地区の道筋左手には、夏坂御番所が置かれていた。いまでも民家の庭の角に、「御番所跡」の標柱が残る。以上で来満街道の本街道だった大柴峠ルート踏査を終え、脇道にあたる来満峠・不老倉峠ルートを見よう。

来満峠越えの道

来満峠越えの道は大湯側の上折戸で本街道と分かれて、不老倉鉱山地区を経て三戸側の関、田子に至るルートだった。これとは別に不老倉峠越えは、来満峠越えの道と別筋を辿り山越えしていた。

不老倉鉱山は四角岳の北側に位置し、天和元年(1681)に発見されたといわれる。もとの名は狼倉(オイヌ倉)だったが、延享四年(1747)に南部藩の直営になって不老倉と改称。当地では古来、オオカミをオイヌ(御犬)・オエヌと呼んで山神の使いとして尊び、



オイヌに老いぬ(不老を重ねて、鉱山の繁栄を願ったものらしい)。

しかしその隆盛は短く、南部藩は寛政6年(1794)、産出量減少や、雪崩による施設の崩壊を理由に休山届けを出している。

来満峠越えの道は、この間の不老倉銅山の銅を野辺地に送るとともに、鉱山集落と三戸側を結ぶ生活道路として開かれたと考えられている。この道が本格的に整備されたのは、明治に入り同鉱山が再建されたからだ。明治11年、古河鉱業が採鉱を始めて発展。大正の最盛期には、人口5,6千人ほどになり、多くの長屋が建ち並び、小学校2校、鉱山事務所、役宅、郵便局、娯楽施設などがあつた。

鉱山町の跡に近づくと、下長沢地区の左手奥に鉱山墓地がある。戦後大量に墓石が盗まれたということだが、



① 来満街道と国道の合流点(青森県田子町夏坂)

来満峠を越えてきた旧街道は、熊原川に沿った道筋を東に進み、ここ夏坂の少し西寄りの地点で国道104号に合流していた。

② 夏坂御番所跡(青森県田子町夏坂)

慶安元年(1648)頃、関村に置いていた番所を夏坂に移し、三戸郡と鹿角郡の物資の輸送や人の出入りを監視した。中番所とも呼ばれた。

③ 奉安殿跡(鹿角市大湯上長沢)

上折戸にあった不老倉の大湯小学校不老倉分校校庭の一角に置かれ、中には昭和天皇の御真影が掲げられていた。現在、小学校の施設では唯一残る遺物のようだ。

④ 下長沢墓所(鹿角市大湯下長沢)

鉱山町の稲荷町から来満峠に向かうセンナ沢沿いにある。墓所はほかに寺の沢、先達の沢と2カ所あつた。「友子」関係の人々の墓石がわずかに残り「南部産」「秋田産」など出身地が刻まれている。

⑤ 来満峠越えの道(鹿角市大湯上長沢)

不老倉から夏坂まではおよそ6.8km。鉱山の生活物資輸送や人の行き来利用された。食料不足時のヒエや粟の買出しに使われ「飢饉街道」とも呼ばれた。

⑥ スリ山(鹿角市大湯元不老倉)

坑口から運び出された鉱石のうち、鉱物を含まない石などをスリと呼ぶ。山の中腹にあつた坑口から崖下に捨てられたスリが山をなした姿である。

⑦ 山神社跡(鹿角市大湯元不老倉)

スリ山に向かって左側の岳ヶ沢沿いの高台にあり、2カ所に鉱滓のガラミで組まれた神社基礎が残る。あたりには奇進者名が彫られた石碑なども見られる。

⑧ 不老倉峠越え(鹿角市大湯元不老倉)

明治初年、鉱山の銅鉱石を三戸まで搬送するために開削され、最盛期には一日600台あまりの馬車が行き来した。不老倉から夏坂までは約8.8kmである。

この地図は国土地理院発行の1/200000地形図を複製したものです。

来満街道